

災害について知る

あなたは命を守れますか？

1995(平成7)年1月17日・午前5時46分 兵庫県南部地震発生

1月17日午前5時46分、ゴーツという音とともに突然大きな揺れに襲われました。最大震度7の強い揺れが15秒ほど続き、死者6,400人を超える大きな被害をもたらしました。

兵庫県南部地震の概要

震源——— 淡路島北部(深さ16km)

規模——— マグニチュード7.3

死者——— 6,434人(関連死を含む)

行方不明者——— 3人

負傷者——— 43,792人

① 阪神・淡路大震災の確定日 2006(平成18)年5月19日(明報)

② 関連死: 地震による直接的な被害ではなく、その後の避難所での体調悪化など間接的な原因で死亡すること。

神戸市長田区

倒壊した建物から出火し、あちこちで火災が発生しました。



(写真提供 神戸新聞社)

神戸市兵庫区

鉄骨がむき出しになり、「く」の字に曲がるよう壊れました。



(写真提供 神戸新聞社)

淡路市(旧北淡町)

地震の揺れにより、古い木造住宅は、全壊しました。



(写真提供 神戸新聞社)



阪神・淡路大震災では、地震の揺れによる住宅の倒壊や火災で多くの方が亡くなりました。また、大都市を直撃した大規模地震のため、電気、水道、ガスなど被害が広範囲に及び、鉄道、道路などの交通網が損壊し、ライフラインに壊滅的な打撃を与えました。

6
防災訓練
7
防災訓練

災害について知る

あなたは命を守れますか？

2011(平成23)年3月11日・午後2時46分 東北地方太平洋沖地震発生

3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0の地震が東北地方の太平洋沖で発生しました。震源に近い所では地震発生後十数分で津波が沿岸に襲撃し、樹や人々を襲いました。大きな津波は第1波だけでなく5波、6波と6時間近く続きました。

東北地方太平洋沖地震の概要

震源——— 三陸沖(深さ24km)

規模——— マグニチュード9.0

死者——— 15,879人(関連死を含まない)

行方不明者——— 2,700人

負傷者——— 6,132人

① 震源: 112°42'東経、38°14'北緯、2011(平成23)年3月11日16:50:02(震源時刻)

宮城県南三陸町

自宅を壊した住宅で津波により流され、命を失った方が多く見られました。



(写真提供 河北新報社)

岩手県宮古市

津波が宮古市港の防波堤をさかのぼり、防波堤を乗り越えました。



(写真提供 近代印刷社)

福島県相馬市

3月11日に押し寄せた大津波、木をなぎ倒し、車などを押し流しました。



(写真提供: 嵐山情報/写真提供: 福島テレビ)

1) 東北地方太平洋沖地震津波の第1波の広がり



東日本大震災では、巨大な津波が、東北から関東地方の太平洋沿岸を次々に襲いました。津波は、大きな壁のように押し寄せ、陸地を駆け上がり、その巨大なエネルギーで建物をなぎ倒しながら多くの人の命を奪いました。岩手・宮城・福島の沿岸部を中心に広範囲にわたり大きな被害となりました。

8
防災訓練
9
防災訓練

「津波てんでんこ」という言葉を知っているだろうか。東日本大震災の被災地、三陸沿岸部に伝わる言葉で、津波のときにはてんでばらばら、つまり一人ひとりで逃げよとの先人の教えである。津波のときには、親子であっても互いを気にせず、まずは自分一人でも逃げよと教えるこの言葉は、津波からの避難はそれほどまでに厳しいのだということを教えてくれる言葉と理解できる。しかし、その一方で、家族の絆を断（た）ってでも生き延びよと教えているようにも聞こえ、何とも薄情な言葉のようにも思えてくる。年老いた親を見捨てて逃げてしまえ。母親であっても子どもを見捨てて逃げてしまえ。「津波てんでんこ」の教えをそのまま理解すれば、そんな薄情な状況が頭に浮かんでくる。

なぜ、先人はこんな薄情な言葉を残したのだろうか。そして、「津波てんでんこ」は本当にそんな薄情なことを求める言葉なのだろうか。」

・・・中略・・・

東日本大震災の大津波に襲われた岩手県釜石市では、多くの子どもたちが懸命に避難をして自分の命を守り抜いた。防災学習を通じて過去の悲しい被害の歴史を学び、津波の恐ろしさを理解し、いかなる津波であっても、自分の命を守ることは避難すること以外にないことを学んでいた。しかし、釜石の子どもたちが懸命に避難したのは、津波の恐ろしさ理解していたからだけではなかった。

「大きな地震のあと、君のお母さんやお父さんはどうすると思う？」そんな問い掛けに、釜石の子どもたちは心配して自分を懸命に探してくれる母親の姿を思い浮かべた。そして、そこに津波が襲いかかる・・・。子どもたちは気付いた。

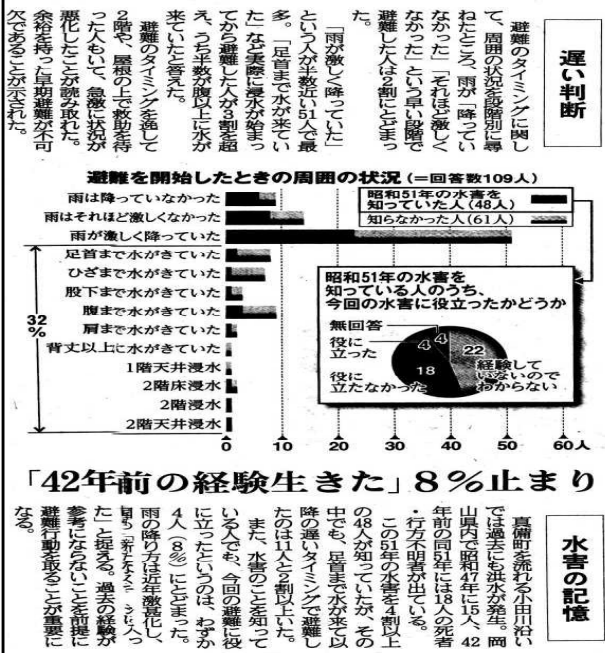
自分の命は自分だけのものではないこと。自分の命をわがこと以上に大事に思ってくれるお母さんがいること。そしてお母さんの命を守るためには、自分がしっかり避難する子にならなければならないことに気付いたのだ。お母さんが迎えに来なくても、自分がしっかり避難する子になって、お母さんがそれを信じてくれれば自分を探さずお母さんも避難してくれると思った釜石の子どもたちは、迫り来る津波の中で懸命に避難したのだった。

防災学習のあと、「お母さん、あのね。僕は公園にいる時大きい地震があったら、あの高台に逃げるんだよ」と、ある釜石の子どもは台所に立つお母さんに話しかけたという。このお母さんは、東日本大震災の揺れのなか、あの日の台所での子どもとの会話を思い出した。そして、わが子が絶対に逃げているとの確信とともに、自分のことを気遣ってくれたわが子に涙を流したという。

釜石の子どもたちの懸命な避難を振り返るとき、「津波てんでんこ」という言葉は、決して家族の絆を断ち切れと教えることばではないことに気付かされる。確かにその日その時、「津波てんでんこ」を実行することは難しいのかもしれない。しかし、日頃から一人ひとりが自分の命に責任を持ちそれを家族が互いに信頼し合う家庭であるならば、「津波てんでんこ」は実行することが可能になる。先人は、そんな絆で結ばれた家族の在り方を教えてくれたのではないだろうか。それは、災害で命を落とさない家庭や地域を作り、防災文化を醸成させていく君たちへのメッセージでもあるのだ。

2013（平成25）年3月

早期避難 わずか2割

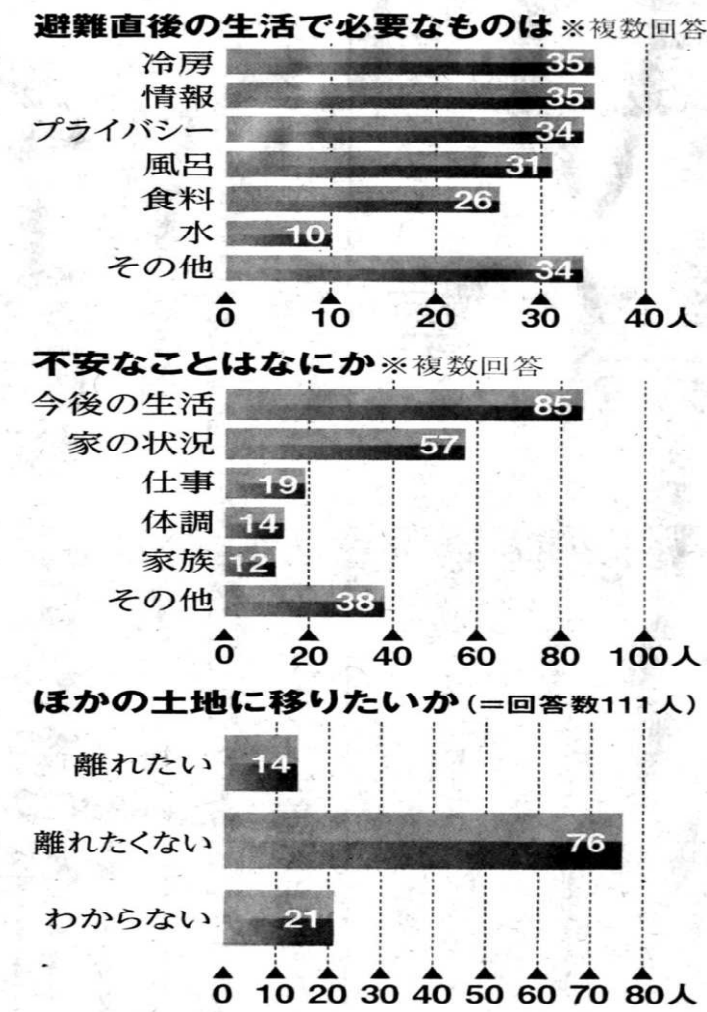


「自分は大丈夫」思い込み



不安は「今後の生活」「家の状況」

ほかの土地に移りたい思いも



避難直後の生活で不足しているものでは、「冷房」が「情報」とともに35人(複数回答可)で最多で、「風呂」も多かった。住民の早期の避難行動を促すための、不安なことは「今後の生活」が85人(複数回答可)と圧倒的に多く、一方、不安なことは「今後の生活」が85人(複数回答可)と圧倒的に多く、喫緊の課題だ。

「家の状況」が続いた。ほかの土地に移り住みたい気持ちの有無を尋ねたところ、「離れたくない」は76人だったが、「離れたくない」も14人いた。被災地の地域コミュニティの維持は難しく、行政が策定する復興プランが重要になってくる。

資料④ 災害時における不安な心理補足説明

① 正常性バイアス：（ ※バイアス：先入観・偏見 ）

「私に限っては大丈夫だろう」という、根拠のない自信。人は、危険を感じると強いストレスを感じる。しかし、強いストレスはできるだけ避けたいので、無意識のうちに、危険を見て見ぬふりしてしまう。

② 多数派同調バイアス（同調バイアス）：

少数の意見より多数の意見を重視してしまう心理。「〇〇が来るぞ！逃げろ！」と、誰か一人が叫んでいても、周りの多数の人間が平気そうな様子だと、間違った多数の意見を重要視してしまい、正しい少数の意見をデマやウソのように扱ってしまう。緊急時、人は一人では自分の判断で行動を起こすが、周りに人がいると安心感で、緊急行動が遅れたり、自分だけが他の人と違う行動を取りにくくなる。皆がいるから危険な場合がある。

③ 愛他行動：

危機的状況に直面すると、自分の命を差し置いてでも他者を助けようとする心理がはたらく。不安や恐怖を感じるほど「だれかと一緒にいたい、親しくなりたい」という親和欲求が刺激されることもあり、他者を助ける過程で避難が遅れて命を落とすことがある。

④ 災害イメージの固定化：

ハザードマップにたよりすぎると想定している災害のイメージを固定化してしまう。想定外の災害に対応しきれなくなる。

⑤ 流言とデマ：

災害時に発生することが多くなる。デマが「意図的に仕組まれた情報」であるのに対して、流言は「人々の間から自然発生的に生まれた情報が、関心を持つ集団の中で広がっていく現象」で、災害時に度々発生する。

流言の特徴は人から人へ伝わる口コミ情報である。事実の確認なく語られる。情報内容が次第にゆがめられていく。話し手や聞き手の感情で変化していく。災害時に流言やデマに惑わされると、日常では考えられない誤った行動や社会的混乱をもたらす。パニックを引き起こし、人の命に関わる事態となる恐れがある。災害に関する正しい知識を身につけ、不確かな情報は、ラジオなどで確かめて行動するようにする。